



流されアシュリー♡ ※お試し版

意馬心猿

【登場人物】

主人公…アシュリー♀

栗色の髪、栗色の瞳。

平凡な女の子の筈だった。

一人称、私。

お相手1…ロキ♂

薄い紫白髪、銀色の瞳。良い所の血筋。企業を展開中。見た目と財力があり分け隔てなく会話するので人気がある。一夜の女性は多い。ヤリチン。

一人称、俺。

お相手2…イド♂

水色の髪、水色の瞳。優し気な美形。性的趣向が若干変。

一人称、私。

大学舎に行く為に、空色から深い夜の群青色に上から下に向かい変わる長いスカートと白いフリル付きの二の腕が出るブラウスを着て出かけた。酷く混む時間帯は過ぎていて魔法石列車は人が少なく席に座れ。夏前の冷房が効いている列車内は快適で少しばかりウトウトしながら目的の駅に辿り着いたのだった。

私の今日の授業内容は生命が食育される現実描写映画の視聴をして、その意見や感想の課題を論文作成して再来週提出というものだ。こじんまりとした教室に入れば席は埋まっており仲の良さそうな者同士で始まるまで、お喋りが交わされている。あいにく友達は、この講座にはいないので後ろの席まで階段を上った。最終席に行けば水色髪の青年と薄い紫白髪の青年が左右の二人がけ席に、それぞれ座っていた。

どちらも知り合いでは無いが、どちらかと相席しなければならぬ。二時限半という大作映画の視聴中、ずっと隣になる相手である。

……水色髪の人、大人っぽくって美形……紫白髪の方は寝ててうつ伏せ……

今寝ているなら授業中も寝ている事だろう。そう考えて顔が見えない紫白髪
の隣側に座った。少しして先生が教室に入り点呼が始まる。名前を呼ばれ私は
『はい』と答えた。水色髪の方はイドと呼ばれていた。

「はい」

良い声しているなあっと思つて、チラリと見れば視線が合い会釈する。ふつ
と微笑みを浮かべて会釈が返された。彼の隣に座つても良かったかもしれない。
単純な自分の乙女心を感じる。少しして隣も声を上げた。

「へーい」

隣を見る。紫白髪のもまた美しい男だった。驚いて目を見開けば、につ
と微笑まれる。彼の身が起きて顔が近付き耳元で小声で話しかけてくる。

「アシユリーだっけ？ 俺はロキ。宜しくな」

「は、はい。よろしくお願いします……っ」

少し身を仰け反らして言えば彼の手が自然と私の腰を掴み引き寄せた。

「……へあっ？」

驚きで変な声が出た。良い香りがする。

「なあ、君、好みなんだけど連絡交換しないか」

「え……だ、大丈夫です」

驚きで思わず断れば、キョトンとした顔をされ笑われた。

「ふはっ、そうか！ 俺を断るとは珍しい」

「そ、それほども……？」

良く分からない会話をしていれば、教室の明かりが落とされ、前側を見れば、チチチ……つと映像が始まる前の光が白い大きな布に当たっている。映画視聴が始まるらしい。教室のざわめきが消えロキの手は腰に回ったまま映画の映像

が流れ始めたのだった。

暗くなり一番後ろの席だからだろうか彼は画面を見ず、こちらを見つめて手を、ゆつくりと動かした。私は内心、動揺しており、かなりの自信持ちの美形に不味い展開だと感じる。これは多分、否、性的な悪戯だ。

「ロ、ロキさん……」

映画視聴中だ。私は小声で注意する。しかし音でかき消されて聴こえないのか視線が合ったロキは綺麗に微笑むだけで手は止めない。私は横にズレようと思えば腰を動かそうとしたが思った以上にロキの腕の力は強く動けない。

「やめ……」

腕を引きはがそうと両手で掴むが、どうもビクともしない。ロキの長い脚が動き私の片足を引つ掛けて間に踵が入り込んだ。長いスカート先の先が少し捲れ。自分の日に当たらない足が薄暗い室内の中見え動揺する。ロキの目線が、そちらに向いて片手が伸ばされた。

「だ、め」

その片手を、私は震える手で掴んで顔を横に振る。しかし腰を抱いている方の手でスカートの上側を掴むとロキは手繰り寄せ、スルツと私の太股を晒した。ふくよかな太股を見られ身を縮こませる。ロキの喉が鳴った。

「俺と付き合ってみる気はない？」

「っこ、困ります……」

耳に囁かれ上手く言葉が出ない。それでも私は言葉を返したが腰を抱くロキの指先が太股の間に、ふにっとなり込み身が固まった。間を指先がツーっと通り。行き止まりを、ぷにっと呼ぶ。

「やわらかい……」

驚いたといった風にロキは独り言ちて私が止めようと動いた両手を片手で掴み引き寄せる。私は瞬きの間にロキの肩に、しなだれかかる形となってしまう。

「まって……」

「白いフリルか……いいな」

「言わないで……」

太股間から付け根まできて軽く押ししていただけの指先が、すりすりと白いフリルシヨーツの上をなぞる。大事な所の割れ目の中心を簡単に当てて私に、ぞわぞわとしたモノを感じさせた。息が乱れ、じわじわとシヨーツの真ん中に温かい湿りが滲んできている。羞恥で私の皮膚は暑くなり汗が垂れた。

「はは……濡れやすいんだな」

二本指平で下側まで滑らすと指を上げて、それを私に態々見せ。私が羞恥か

ら泣きそうなのを我慢しながら彼を睨むと、ロキはにっと笑い、ショーツに手を、ズボリと入れ込んだ。

「ひっ」

驚きで身が跳ねた。

くち、くちゅ、くち、くちゅ。

「温かくて柔らかくて具合が良さそうだ……」

「あ、や……んっ」

「興奮してるのか？ 君の膨らんでカチカチだぞ」

人の目がある場所だからか私の身体は異様に反応し敏感な部分はずでに勃起して快感を拾おうとしていた。密閉された中で、くちくちと静かに水と摩擦の混ざり合った音がする。映画が命の尊さについて主張し薄暗い室内で大きな心

情を現す音声を示しているが私は、そちらに集中できなくなっていた。

「あ……ふあ……っ♡」

「先ずは、これでイかせてやろうな」

ご機嫌なロキは、そう言つて三本指で膨らんだ豆を弄り刺激する。二本の指で左右から挟まれ、こしこしされながら上を優しく撫でられ。ぞくぞくとした甘い感覚に腰が上がり、もう気持ちちは高みばかりを目指して心から逃げる気持ち^ちが失われてしまう。気が付けば高みがきた身体が跳ねロキに、しなだれていたのだった。

☆続きは本編で！

流されアシュリー♡ ※お試し版

発行日 2021年7月21日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
